

日吉大社自然観察倶楽部通信

No.5 日吉茶園のお茶作り & お茶会 H23年5月22日

天気予報では雨、今にも降り出しそうな雨雲の下、15名の参加者とお茶作りを行いました。場所は、京阪坂本駅の駅前にある日吉茶園です。



小雨が降ってきたので、お祓いが済むとすぐ、お茶の葉を摘み始めました。(左の写真) お茶の葉として使えるところは、一芯二葉（先端と、その下の葉2枚）です。新芽を食べる事は、山菜のてんぷらと通じるところがあります。ここでは、覆いをしたもの(玉露)と、していないもの2種類を摘みました。

その後、雨足の強まる中、日吉大社内の日吉会館に移動しました。

そこで、須原さんから日吉大社とお茶の関わりに付いて説明がありました。それによると、最澄が唐から(薬として)持ち帰ったお茶の実が、日吉茶園の始まりだそうです。昔はお茶作りが盛んで、日吉大社内にも製茶所があり、日吉茶として有名だったそうです。ただ残念なことに、比叡山の焼き討ちでお茶の木的大部分は燃えてしまいましたが、文献によると3mクラスのお茶の古木もあったようです。

ここからは、いよいよお茶作りです。今回は、前回(10年5月30日；釜炒り茶)に一手間(蒸す工程を)加えて煎茶に挑戦です。工程は大まかに以下のとおりです。

- ① レンジでチン(蒸す)
- ② ホットプレートで炒る
- ③ 手で揉む
- ④ ②～③を5回繰り返す
- ⑤ ホットプレートで成形しながら仕上げの乾燥



ホットプレートで炒っているところ



③ 手で揉んでいるところ

①のレンジでチンする工程はボタン1つで終了しましたが、②のお茶の葉を炒る工程と③の手で揉む工程は何回も繰り返すため、後半は皆さんの疲れが目立ってきました。ただ、お茶を煎ると、なんともいえない香ばしい匂いが漂ってきます。そして、手揉みを重ねるとお茶の葉がどんどん柔らかくなっていくのを感じました。この作業風景が、昔は(家で飲むお茶を作るため)坂本のどこでも見られたそうです。

この作業を、煎茶班と玉露班に分かれて1時間ほど行いました。そして、出来たお茶が左下の写真です。左が煎茶、右奥に見えるのが玉露です。色の違いは、煎茶が茶色混じりの緑に対し、玉露は深緑でした。味は、参加してのお楽しみです(^o^) 前回の釜炒り茶は、香りが強く、すっきりした印象でしたが、今回の煎茶は、甘みが強くて後味が良かったです。参加者の皆さんの評価はどうだったでしょうか？



右は
煎茶



続いて午後からは、裏千家の原地先生(下写真の右奥)のご指導によるお茶会に参加しました。お茶会で使われる抹茶は、出来たお茶の葉を臼でひき、粉にしたところが一番の特徴です。今回は電気を使わず、炭を使って茶釜のお湯を沸かし、お茶をたてていただきました。



左の写真がその様子です。床の間の掛け軸やお花・膝の悪い方でも楽しめるように椅子を準備していただくなど、すごく気を配っていただいている事を感じました。

お湯のみも一つ一つ違って、作法と共にお茶会の楽しさを教えていただきました。もちろん、お茶菓子の青梅もとてもおいしかったです。

抹茶だけだと少し苦いのですが、和菓子を食べた後に抹茶を頂くとすごくおいしく感じました。お茶の楽しみ方も色々あるものですね。

最後に、辻田先生から、今回のお茶作りとお茶会に対する思いを紹介して、結びとさせていただきます。

<お茶作りについて>

茶と言わずに、「お茶」と私たちは言います。ペットボトル入りのお茶など売れないという予想に反して、大いに飲まれています。この二つのことは相反することのようですが、私たちは、お茶は身体によいものだという感性を伝統的に受け継いでいるのだと思います。それほど、お茶は日本人にとって特別なものなのですね。（お米以上かもしれません。）しかし、このお茶も元となる茶の木がどんな木かとも知られることなく、（かつては家や田んぼにあった茶の木も今や私たちの身の回りではもう見当たりません。）ましてや、作り方など顧みようともされなくなってしまいました。ここにも、茶という自然物を通して、「生産」と「食」のつながりが切れているのです。私たちの生活の中で、自然と生活のつながりが切れたことを象徴的に表すものではないでしょうか。そんなつながりを少しでも取り戻したいと思い、この企画を行いました。



←炭をたてている様子

<お茶会について>

茶道の心は、究極は感謝とおもてなしの心だと原地先生からお聞きしたことがあります。軸をかけ、花をいれ、お茶をすくう。その洗練された動き、全てが感謝し迎える心の表れだという意味だと思います。お茶をつぎ、お湯をわかし・・・、すべての動きが美しい動きでした。ここに美を求めたのだと思います。そのためにはやはり、日本人にとってはお茶が重要だったのではないのでしょうか。まさに、自然を生活の中に取り入れた芸術ではないのでしょうか。自然と生活とのつながりの中に美を求めたのではないのでしょうか。お茶会にお招きいただき、こんな感想を持たせていただきました。